



臨床検査技師は 医療界の ES 細胞(胚性幹細胞)かもしれない？

宮 下 勉
(医療法人社団鴻鵠会)

はじめに

「臨床検査技師のお仕事紹介」とはかけ離れた内容になるかと思いますが、考えてみると検査技師に関わることが可能な医療関連業務は多岐にわたると思います。また、新たな医療関連国家資格が定められた過渡期には臨床検査技師に受験資格が与えられた時期もありました。例えば、臨床工学技士や言語聴覚士等がそれらの資格にあたりと記憶しております。ダブルライセンスとして検査業務を継続する者と臨床工学技士に転職された方もおります。

また、認定資格や専門性の高い資格を取得して一般的な検査業務から離れた方も多いかもかもしれません。私自身も「診療情報管理士」を取得しましたが、同時期に受験した検査技師仲間には診療情報管理室に移動した方もいらっしゃいました。その様な視点で、臨床検査技師は医療界の ES 細胞(胚性幹細胞)かもしれない？との妄想に駆られます。つまり、スタートが臨床検査技師であっても経過やゴールが臨床検査技師でなくても良いのではないかが現在の私の考えです。

私が臨床検査技師を目指した時は、例えば、病院等に勤務して、専門分野を勉強・自己研鑽を続け、同じ職場で定年を迎える。そんな、真っ直ぐな道を走り続けるイメージでした。しかし、私の現実には紆余曲折・試行錯誤・悪戦苦闘の連続であり結果として辿り着いた事実が後付の言い訳となっていることには変わりはありません。

I. 検査技師を目指したわけ

小児喘息ありの虚弱体質・子供の頃から病院通いだったので医療職には興味がありました。そんな話を高校の担任に伝えると「臨床検査技師」と言う職業が有ることを教えられました。父は建築関連の仕事をしておりましたが、後を継ぐ気は全くなく、また、親への反発心もあり高校卒業とともに家を出て、昼は病院の検査室でアルバイト、夜は専門学校に通う形で臨床検査技師への道がスタートしました。

当時関わった業務が、心電図・心音図・呼吸機能・超音波等の生理検査業務で、この時の経験は私の臨床検査技師としての礎になっております。

II. 様々な仕事を経験して

専門学校の卒業時、就職先が内定していたのは製薬メーカーでした。しかし、直前になって内定を辞退、その後、研究補助・病院勤務・巡回検診や、ある時期、医療とは全く関連のない業種で起業もしました。それぞれの経験で次への業務に役立つ知識を蓄積することができました。

例えば、巡回検診では検査の為の設備が整っていないような場所であっても工夫を凝らして実施する術を得ることができましたし、検査技師が1人しかいない場合には、頼れる人間が他にいない訳ですから、自信と責任を持って業務を遂行する。当たり前のことですが、若かりし頃の自分には、大きな糧となっておりました。

また、起業の際に携わった部門が、営業・経理といったお金を扱う部門の責任者の立場だったので、流通のシステム・資金管理・総合的なマネジメント等を学び、経営に関する基本的な知識が得られたと考えられます。

この頃は、自分自身が何をしたいのかが判らず迷走していた時期です。その様な環境下で、臨床検査技師として仕事をあらためて考える切っ掛けになったのは祖母の死でした。ちょうど、医療の世界から離れていた時期です。祖母の病状については、風邪をこじらせて入院したと聞いていたのですが、見舞いに行ってみると、昏睡状態で顕著な黄疸が出ていました。呆然として、ベッド脇に座り込みます。何となく目に止まった尿バッグには尿がほとんど溜まっておらず、気になってナースに伝えると、慌てて担当医を呼んだり…結局、翌朝を待たずに逝去となりました。臨床検査技師の国家試験が受かった時に、最も喜んでくれた祖母でしたので、もし、自分が医療関係者だったら、何か、違う対応ができたかもしれないと、心を過ります。そして、あらためて自分がやりたいことを考え臨床検査技師の業務に復帰することに決めました。

III. 学びとキャリア形成

頼りになる先輩がいれば導いてくれると思いますが、私の検査技師としてのリスタートでは、その様な状況ではなく、自身で情報を収集し学びの環境を構築する必要がありました。そんな時に、メーリングリストの存在を知ります。今ではSNSと言う形態に変化しておりますが情報を得ることは何らかの足がかりとなります。

メーリングリストで様々な立場の方々と意見交換・情報交換を行っている、文字通り「井の中の蛙が大海を知る」状態となりました。それを切っ掛けに、多種多様な活動に参加しました。技師会会務や学会発表等も積極的に行いました。それと、多くの開業医の先生方にも懇意にいただきました。

ある開業医の先生方との集合写真ですが、10年以上のイベント定例開催を事務局としてお手伝い

をしていました。一人だけ浮いた感じで映っていますが、きっと、病院ではできなかったであろう医師との関係づくりができた気がします(写真1)。

お誘いを受けると、どこにでも出社して、この時期、月の2/3は、何かの予定が入っている状況でした。出会いは、人脈を広げることとキャリア形成に繋がると実感しています。現在の仕事も、この時に知り合った医師からの誘いがあります。

IV. 在宅医療に興味をもった理由

コロナ禍の影響もあり近年在宅医療について注目されておりますが、臨床検査技師が関わる機会は、まだまだ少ないかと思えます。

私の父は肺がんで、この世を去りました。この時、姉弟や親戚からの強い要望で父母には病名を告げませんでした。結局、父は病院で1年を過ごし、亡くなりましたが、この時に在宅医療を知っていたら、もっと違った最期が過ごせたのではなかったかと現在は感じています。

私が在宅医療に興味を持ったのは、先駆的な訪問診療医師との出会い、離島・僻地医療の見学、第1回POCセミナーに登壇させていただき、POCTは在宅医療等に活躍の場があると、自身で結論づけたことに起因します。ですから、在宅医療の素晴らしさを検査技師仲間にも知って頂きたい、技師会でも在宅医療をテーマに研修会を企画したりしたのは、20年ほど前のことです。この時、ご登壇を頂いた方々は、いっそう活躍されており、今でも繋がりがあります(写真2)。

V. 在宅療養支援診療所に勤務して

現在の勤務先は、在宅療養支援診療所です。地域包括ケアシステムを担う重要な医療資源であり、24時間・365日の診療体制を維持する診療所です。

在宅医療は急性疾患に対し医師が往診する形式で古くから行われておりましたが、1992年の第二次医療法改正において「居宅」「医療提供の場」として位置付けられ日々の発展を遂げています。また、昨今ではオンライン診療も在宅医療の現場で注目されており、古くて新しい医療形態と言えます。



写真1 医師会の先生方と 最前列左端著者



写真2 都臨技セミナー1・2

ると思います。現在の在宅療養支援診療所に勤務してからも、すでに10数年が経過していますが、臨床検査技師として在宅医療の現場で活躍するこ

とは難しいと感じておりました。その理由の一つとして、在宅医療は、しばしば看取りの医療と認識されることであり、その様な状況下では積極的

な検査は行われなことを。

しかしながら、昨今、医療必要度が高い患者が早期に病院を離れ、在宅あるいは在宅に準ずる施設等において療養する機会が増えており、また患者・家族側が求める場合も含めて、在宅での臨床検査の重要性は非常に高まることが予想されます。在宅の現場において充実した臨床検査が実施可能となれば、検査結果による客観的な病状把握や診断、また予後予測も可能となるだけでなく、検査のための入院や不要な救急搬送の頻度を減らすことができるかもしれません。勿論、長期療養が必要であり通院が困難となった方々も在宅医療の対象となります。在宅医療の現場でも、診断・治療は必要不可欠であり、臨床検査が重要な位置にあるのは病院医療と何ら変わりはありません。

つまり、在宅医療もタスク・シフト/シェアを念頭に臨床検査技師の活躍の場であると認識ができます。コロナ禍にて活躍する在宅医療チームがテレビ等でクローズアップされています。在宅医療への関わりについても、多職種で再考する時期ではないでしょうか？勿論、私たち臨床検査技師もその一員です。在宅医療の現場を検査技師に理解して頂くこと、検査技師が在宅医療の現場で活躍できることを発信することは、私のライフワー

クとなっております(写真3)。

在宅医療の現場に勤務して、あらためて臨床検査技師の「臨床」とはなんぞや？を考える出来事がありました。

ある時、患者情報提供書の中に呼吸機能検査結果が入っていました。それをみた私の感想は「もっと、良いデータが出せなかったのだろうか？」でした。その後、その患者さんの診療に同行したのですが、患者さんの疾患はALS。病状が急速に進行していて、人工呼吸器を装着するかどうかの状態。つまり、その呼吸機能検査結果で予後の判断をしたのです。結果、人工呼吸器の装着は拒否となり、私は愕然としました。

自身の出した検査結果が、どの様に臨床の場で使われるか？病院にいた時には検査結果を出して終わりでした。今の職場で「臨床」の意味を知った気がします。

この経験から、在宅医療の世界にも、もっと検査技師に進出して欲しいとの思いがあります。しかし、医療の知識だけでは、在宅医療のチームに参画するのは難しいと思います。必要な教育カリキュラムの策定と認定制度ができれば良いなど考え『在宅訪問臨床検査技師』の創造を夢見ております。



写真3 第5回在宅医療連合学会シンポジウム登壇者と

おわりに

今の職場では検査業務に携わる時間が少なくなって、現在は総合的なマネジメント業務に終始しております。不得意な業務・未経験な業務が後から後から湧いて出る感じがしていて、新たな経験と成し遂げた時の達成感には楽しさと辛さが混在した状態です。

私の趣味の一つ、体力維持の一環として東海道五十三次・徒歩の旅を行っております。コロナ禍の影響もあり名古屋辺りで足踏み状態ですが今後も継続する予定です。

東京・名古屋は新幹線で90分程度の距離。車窓の富士山を眺めながら、ゆっくりと過ごすのも良いです。しかし、歩いてみると、東海道らしい松並木だけではなく、未舗装の林道等もあり、新たな発見、出会い、気付き等、新鮮な感情を楽しむことができます(写真4)。

還暦を過ぎた今、寄稿にあたり、あらためて臨床検査技師としての仕事を考える切っ掛けをいただきました。検査技師仲間からは「検査技師の突



写真4 東海道愛知県豊明市辺り技師仲間と

然変異種」と呼ばれており異質な経歴ではありませんが、ご笑覧いただけましたら幸いです。